

ネパール「食糧がない」

大地震被災地支援 AMDAの3人帰国会見

ネパール中部で4月25日

に発生した大地震で、国際医療NGO「AMDA（アマダ）」から派遣されていた菅波茂・AMDAGルー代表ら3人が10日、帰国後の記者会見を岡山市北区伊福町の本部事務所で開

いた。

4月30日に岡山市を出発した菅波代表のほか、現地時間の同27日に第1次派遣チームとしてカトマンズの現場に入ったクアラルンパール事務所長の大政朋子さん(43)と、本部職員で看護

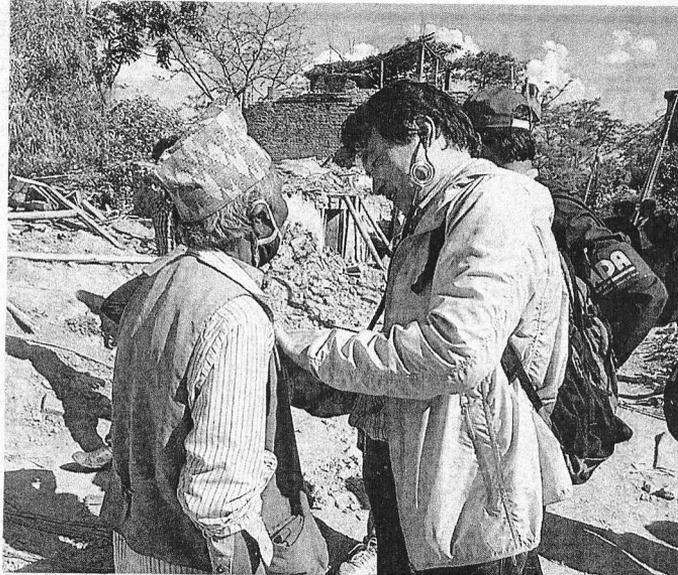
師の柴田幸江さん(37)が、被災地の厳しい状況などを報告。菅波代表は「現地は6月から雨期に入る。地震で家を失った人が多く、要望で一番多いのはテントで、食糧、医療と続く」と述べ、「がれきや山崩れなどがあり、支援チームが現地に入れない地区もある」と一層の支援を訴えた。

大政さんは「空港は停電していて、通信は寸断状態。5分後には情報が変わるような状況で、被災者たちは混乱していた」と到着当日を振り返る。この日はAMDANEパール支部と合流し、カトマンズ周辺で医療支援活動を展開。29日には北東部のシンドウパールチョクへ。現地の病院の近くに仮診療所を開設し、無償で患者を受け入れはじめた。

「とにかく食糧がなかった」と話すのは柴田さん。

「現地のスタッフは2日間、ビスケット1枚と水1本で生活していた」としながらも、「本来のネパールはきれいなところ。頑張って復興するので、また来てほしい」と言われたという。「自分たちの置かれた状況が大変なのに、私たちのことを思いやる姿勢に感動した」と語った。

10日には、医師や看護師ら5人がカトマンズに向け、岡山を出発した。AMDANE本部からの派遣は5回目、これで計18人となった。



被災地で医療活動を行う菅波代表(3日、カトマンズで)＝AMDA提供



ネパールでの支援活動について報告する左から大政さん、菅波代表、柴田さん(岡山市で)